

## 【資 料】

## 手術室実習における看護学生の学び

池 田 奈 未<sup>\*1</sup>, 百 田 武 司<sup>\*2</sup>, 植 田 喜久子<sup>\*2</sup>

## 【要 旨】

研究目的は、看護学生の手術室実習の学びを明らかにし、実習指導のあり方を検討することである。学生30名の手術室実習の記録を分析した。手術室実習における学生の学びとして、【手術室の環境の理解】【手術に関連した影響】【手術室看護師の役割】【手術室看護師の関わり】を見出した。学生9名に半構造化面接を行った結果、手術室看護師の関わりとして、【対象を尊重した関わり】【対象の気持ちを理解した関わり】【対象を成長に導く関わり】【短時間の対象との関わり】【安全安楽のための関わり】【言語的コミュニケーションが困難である対象との関わり】を見出した。学生は、手術室看護における対象の特性、看護援助の目的や方法について理解し、ヒューマン・ケアリングについて体験に基づき言語化していた。今後、実習指導者は、学生が病態生理学的な状態を治療との関連から理解し、より質の高い周手術期看護を創造できるように関わる必要があると考える。

【キーワード】 看護学生、手術室実習、手術室看護師の関わり

## I. はじめに

手術療法は、侵襲やリスクを伴うものであるが、医療が高度化している近年でも、患者の重要な治療法の一つである。そして周手術期患者は急激な変化をしている。

A看護大学では、手術療法を受け、生命の危機状態にある対象の理解と看護を学習するため、平成19年度より手術室実習を実施している。手術室実習は、3年次から4年次に行う「クリティカルケア看護実習」に位置づけている。看護学生（以下、学生とする）は、1日間の見学を主とした手術室実習を行い、その学びを記録用紙にまとめカンファレンスでディスカッションし、手術室看護についてヒューマン・ケアリングの観点から考察を深めている。教員及び臨床実習担当者（以下、実習指導者とする）は、学生の実習記録やカンファレンスの内容など学生の意見に基づき、実習内容や指導方法を考える必要がある。先行研究では、手術室実習の学生の学びについての報告（奥村他，2003；北村他，2004）があり、学生が捉えた手術室看護は患者を中心とした看護であることが明らかにされている。しかし、人を全体

的・全人的な存在とし、そのケアを、癒しとトランスパーソナルな関係（Watson,J, 1988）とする、ヒューマン・ケアリングな視点が、手術室看護についてどのように理解しているかについて調査したものではなく、調査方法は実習記録の分析によるもののみであった。

そこで、A看護大学における手術室実習における学生の学びを明らかにし、ヒューマン・ケアリングな理解を深めることができる手術室における実習指導のあり方を検討するためには、学生の実習記録の分析に加えて、手術室実習における学生の考えを面接調査により明らかにすることが有用であると考えた。

## II. 研究目的

1. 手術室実習における学生の学びについて、学生が実習後に記載した実習記録から明らかにする。
2. 手術室実習で学生が認識した手術室看護師と対象との関わりについて面接調査から明らかにする。
3. 1. 2. の結果に基づき、ヒューマン・ケアリ

\*1 広島赤十字・原爆病院

\*2 日本赤十字広島看護大学

ングな看護実践について、理解を深めることができる手術室実習のあり方を検討する。

### Ⅲ. 研究方法

#### 1. 研究対象者

3 年次後期から 4 年次前期に手術室実習を行った A 看護大学の学生全員に、口頭および研究依頼書によりヒューマン・ケアリングな看護実践能力を育む手術室看護学実習のあり方を検討するため、学生の学びの現状を明らかにするという研究趣旨と倫理的配慮を説明した。同意協力が得られたのは、実習記録の分析は 30 名、面接調査の分析は 9 名であった。

#### 2. 研究期間

実習記録の分析は、平成 21 年 10～12 月、面接調査は平成 21 年 12 月～平成 22 年 1 月であった。

#### 3. データ収集方法

1) 研究への協力が得られた学生の実習記録から、療養環境が対象者・家族に及ぼす影響、手術室における看護の特徴についての記述内容をデータとして抽出した。

2) 実習記録のデータ分析後、手術室実習で学生が認識した手術室看護師と対象者との関わりを明らかにするために、独自にインタビューガイドを作成し半構造化面接を実施した。インタビューガイドの主な内容は、学生が手術室看護の必要性和、手術室看護師と対象者との関わりについて、どのように考えたかであった。

#### 4. 分析方法

##### 1) 実習記録の分析

研究者らが実習記録を精読後、学生が手術室看護として意味づけ解釈している内容を抽出した。その後、類似性を分類整理し、より抽象的なレベルでカテゴリー化し命名した。

##### 2) 面接の分析

研究者らが面接内容の逐語録を作成した。その後逐語録を精読し、手術室看護師の関わりについて語った文章を抽出し、類似性を分類整理し、より抽象的なレベルでカテゴリー化し命名した。

なお分析にあたっては複数の研究者で検討し、分析結果の厳密性の確保に努めた。以下、カテゴリー【】、サブカテゴリー〈〉で、学生の記録、語りは「」で示した。

### Ⅳ. 倫理的配慮

対象者に対して研究目的、方法、安全性、プライバシーの保護、同意撤回の自由などを書面と口頭で説明し同意を得た。依頼は学生の成績評価後に行い

評価や就職、就職後の仕事に影響がないことを約束した。分析時は個人が特定されないよう氏名欄を消去して分析を行った。なお、本研究は日本赤十字広島看護大学の研究倫理委員会の承認を得た (No. 090)。

### Ⅴ. 結 果

#### 1. 手術室実習における学生の学び (表 1)

学生 30 名の実習記録を分析した結果、手術室実習における学生の学びとして、【手術室の環境の理解】【手術に関連した影響】【手術室看護師の役割】【手術室看護師の関わり】の 4 つのカテゴリーを見出した。

##### 1) 【手術室の環境の理解】

【手術室の環境の理解】とは、空調や清潔区域といった手術室の特殊な環境の理解に関するもので、〈手術室の空調管理の理解〉〈感染予防のための環境の理解〉で構成されていた。

〈手術室の空調管理の理解〉

「手術室内は陽圧となっており、外界からの埃や細菌などの異物が入らないようになっている。」

「手術室では HEPA フィルターを使用し、垂直層流型の空調を用いて、塵・埃・菌などが手術室内にとどまらないよう調整されている。」

〈感染予防のための環境の理解〉

「交差感染を防ぐためドアの開閉は足で行い、患者の移動も一方通行となっている」

「手指消毒、ガウンテクニック、術野の消毒、器械・器具・リネン類の滅菌などにより手術室は無菌状態を保つようにしている。」

##### 2) 【手術に関連した影響】

【手術に関連した影響】とは、手術に伴う物理的、人的環境や手術自体による影響に関するもので、〈手術室の物理的環境が与える影響〉〈人的環境が与える影響〉〈麻酔・手術による影響〉〈手術に関連した対象への精神的影響〉〈手術に関連した対象の家族への精神的影響〉で構成されていた。

〈手術室の物理的環境が与える影響〉

「手術室は閉鎖的な空間であり、患者さんにとって、病室との違いにとまどいや不安、緊張が増強されるのではないかと考えられる。」

「医療機器が並べられた初めての空間に入り、(対象の) 不安、緊張はさらに増強するだろう。」

〈人的環境が与える影響〉

「マスクやガウンに覆われた病棟とは違うスタッフに囲まれ、患者の緊張や不安が高まる。」

「(対象は) 多くの人に囲まれ緊張が高まり、血

表1 実習記録分析による手術室実習における学生の学び

カテゴリー	サブカテゴリー
手術室の環境の理解	手術室の空調管理の理解
	感染予防のための環境の理解
手術に関連した影響	手術室の物理的環境が与える影響
	人的環境が与える影響
	麻酔・手術による影響
	手術に関連した対象への精神的影響
	手術に関連した対象の家族への精神的影響
手術室看護師の役割	対象の状態の把握
	リスクの予防
	安全な手術のための準備
	手術室チームの役割分担と連携
	手術室看護師に求められる能力と学習
手術室看護師の関わり	術前訪問での関わり
	短い時間での関わり
	意思疎通ができない対象との関わり
	対象の代弁者となり安全・安楽を守る関わり
	対象との関わりによる不安・緊張の緩和
	環境整備による不安・緊張の緩和
	家族との関わりによる不安・緊張の緩和

圧・脈拍が増加する。」

〈麻酔・手術による影響〉

「対象者は麻酔で意識や痛みがなくなり、自分でコントロールできない状況で、医療者にすべて任せる状態になる。」

「手術中は同一体位でいるために、褥瘡や深部静脈血栓症が発生しやすい。」

〈手術に関連した対象への精神的影響〉

「未知な体験である麻酔、手術、術後の生活への不安、生命に関する不安など、(対象は)様々な不安を感じる。」

「手術は十分な説明のうえで行われるものであるが、手術自体への不安、術後疼痛への不安、術後合併症の不安など(対象は)様々な不安を持つことが考えられる。」

〈手術に関連した対象の家族への精神的影響〉

「手術は患者さんのみでなく、家族に対しても重大な出来事である。」

「家族も対象者と同じように手術室に自分の家族が入り、手術を受けることに対して期待や不安、恐怖といった心理的負担は大きい。」

### 3) 【手術室看護師の役割】

【手術室看護師の役割】とは、手術室看護師の機能や能力に関するもので、〈対象の状態の把握〉〈リスクの予防〉〈安全な手術のための準備〉〈手術室チームの役割分担と連携〉〈手術室看護師に求められる能力と学習〉で構成されていた。

〈対象の状態の把握〉

「心電図・血圧・脈拍・SpO<sub>2</sub>などのモニターを注意してみたり、手足の冷感の確認を行い観察をし、医師と協力してケアを行っていることが分かった。」

「手術中は出血量の確認やガーゼカウント、モニタリングを行う。」

〈リスクの予防〉

「褥瘡、神経損傷の予防のため、その人に合った体位の固定を行う」

「褥瘡・神経圧迫・深部静脈血栓の予防や感染予防、対象者の誤認予防、低体温予防などがある。」

〈安全な手術のための準備〉

「手術室看護師は患者が安全かつ安楽に手術を受けられるように、入室前から環境を整える。」

「器械だし看護師は手術が安全かつ円滑に進むように無菌操作を行い、手術の進行に合わせて医師が要求するものを予測して確実に渡す。」

〈手術室チームの役割分担と連携〉

「効果的に治療が行えるよう他の専門職と連携する。」

「看護師間が連携をして物品の確認や補充、清潔野の維持を、常に声に出して確認をとりながら役割を行っていた。」

〈手術室看護師に求められる能力と学習〉

「すべての科の手術に参加するため術式の数が多く、覚えることが多い。」

「同時進行で多くのことを行い、広い視野、正確

な判断、予想する力が必要となる。」

#### 4) 【手術室看護師の関わり】

【手術室看護師の関わり】とは、手術室看護師の対象や家族に対する関わりに関するもので、〈術前訪問での関わり〉〈短い時間での関わり〉〈意思疎通ができない対象との関わり〉〈対象の代弁者となり安全・安楽を守る関わり〉〈対象との関わりによる不安・緊張の緩和〉〈環境整備による不安・緊張の緩和〉〈家族との関わりによる不安・緊張の緩和〉で構成されていた。

##### 〈術前訪問での関わり〉

「術前訪問を行い、手術に立ち会う看護師の顔を患者に知ってもらうことで、安心感へとつなげていた。」

「前日に術前訪問が行われ、対象者がスムーズに手術を受けられるよう、情報提供や不安への支援がされていた。」

##### 〈短い時間での関わり〉

「一人の患者さんに2人の看護師がつき、手術時間という短時間に集中して看護を行う。」

「対象者に関わる時間が少ないので、病棟の看護師との連携や術前訪問での関わりが大切になると考えられる。」

##### 〈意思疎通ができない対象との関わり〉

「病棟看護師と比べると、コミュニケーションの時間は少ないけれども、患者に起こっていることを想像する重要性が高い。」

「術中は麻酔が効き、何も訴えてこない患者さんであるけれども、その患者さんが今何をしてほしいか想像しながら看護をする。」

##### 〈対象の代弁者となり安全・安楽を守る関わり〉

「対象者の代弁者となり、その対象者にとって安全で安楽な状態は何かを考えてケアする。」

「麻酔が行われると、患者さん自身で良肢位を保つなどの安楽を守ることが困難であるので、看護師が患者さんの安全・安楽を守る。」

##### 〈対象との関わりによる不安・緊張の緩和〉

「手術室に入るとすぐに患者さんの側に看護師が寄り添い声かけを続けて行うことで、慣れない空間での安心感につながると感じた。」

「対象者の不安を軽減させるために、搬入時にマスクをはずして笑顔でタッチングなどを行っていた。」

##### 〈環境整備による不安・緊張の緩和〉

「必要な物品や器材がたくさんあるが、できるだけ患者の目に入らないようにカバーをかぶせ、ライトの位置をずらしておくなどの配慮を行っていた。」

「ベッドを温めておくことは術中の低体温を防ぐ目的の他に、不安の軽減につながるのではないかと考えた。」

##### 〈家族との関わりによる不安・緊張の緩和〉

「家族にPHSでいつでも連絡できるようにしておくことや、手術終了後の早期の連絡は安心につながる。」

「家族の方が持っている携帯電話から看護師さんの携帯電話に連絡がとれるようにしており、家族の方が安心していられるように配慮していた。」

## 2. 手術室看護師の関わり (表2)

実習記録を分析した結果より、学生が【手術室看護師の関わり】について多く語られ、また、学生は、【手術室看護師の関わり】に視点をおき手術室実習を行っていると考えられた。そこで、学生9名に【手術室看護師の関わり】について、学生の認識を明らかにするために半構造化面接を行った。その結果、手術室看護師の関わりと、手術室看護の課題という2つの局面を見出した。

手術室看護師の関わりとして、【対象を尊重した関わり】【対象の気持ちを理解した関わり】【対象を成長に導く関わり】【短時間の対象との関わり】【安全安楽のための関わり】【言語的コミュニケーションが困難である対象との関わり】を見出した。さらに手術室看護の課題として【援助的人間関係形成に疑問を感じる】【対象と関わることの意味を考える】を見出した。

### 1) 手術室看護師の関わり

#### (1) 【対象を尊重した関わり】

【対象を尊重した関わり】とは、手術室看護師が麻酔下にある対象をどのように捉えているかということで〈意識のない対象を人として尊重する〉〈看護師が対象を気遣い関わる〉で構成されていた。

##### 〈意識のない対象を人として尊重する〉

「意識はないが、物ではなく人として看護しているところで関わりがある。」

「患者は意識がないが配慮されているのをみて、どこも一緒だと思った。」

##### 〈看護師が対象を気遣い関わる〉

「手術室看護師の表情やタッチングひとつひとつが大事である。」

「手術室では患者の意識がないから、さらに気持ちは持つべきだと思った。」

#### (2) 【対象の気持ちを理解した関わり】

【対象の気持ちを理解した関わり】とは、手術室看護師が対象の気持ちを理解し受け止める関わりの

表2 学生が認識した手術室看護師の関わりと手術室看護の課題

局面	カテゴリー	サブカテゴリー
手術室看護師の関わり	対象を尊重した関わり	意識のない対象を人として尊重する 看護師が対象を気遣い関わる
	対象の気持ちを理解した関わり	不安を受け止める 対象の思いを理解して関わる
	対象を成長に導く関わり	対象が治癒するために関わる 対象が手術を乗り越えた自信を得る関わり
	短時間の対象との関わり	一人の対象との関わりは継続できない 一人の対象との関わりを他の対象に活かす
	安全安楽のための関わり	身体的ケアを通した関わり
	言語的コミュニケーションが困難である対象との関わり	術後の看護をサポートする 言語的コミュニケーションの機会を活かす
手術室看護の課題	援助的人間関係形成に疑問を感じる	語らない対象との関わりを考える
	対象と関わることを意味を考える	効果がみえないケア 看護実践の評価をどのようにするのか

ことで〈不安を受け止める〉〈対象の思いを理解して関わる〉で構成されていた。

〈不安を受け止める〉

「強烈な不安に対して看護師の存在は近い。」

「患者の心の支えになって、患者は生きてて良かったと思えるかもしれない。」

〈対象の思いを理解して関わる〉

「患者が頑張っているから、看護師も無駄のないようになど思う」

「治してほしいという思いと、治ってほしいという思いの相互作用で成り立っている。」

(3) 【対象を成長に導く関わり】

【対象を成長に導く関わり】とは、手術室看護師は対象が手術を乗り越え治癒する一助となることで〈対象が治癒するために関わる〉〈対象が手術を乗り越えた自信を得る関わり〉で構成されていた。

〈対象が治癒するために関わる〉

「安全でその人が望むような結果になる手術を行うことが大事だ。」

「患者の目標の過程にある関わりは手術室看護師の役割だと思う。」

〈対象が手術を乗り越えた自信を得る関わり〉

「患者が手術を乗り越えたことは成長で、看護師はその人に合った手術を提供することで成長できる」

「患者は乗り越えたという自信になると思う。」

(4) 【短時間の対象との関わり】

【短時間の対象との関わり】とは、手術室看護師の関わりは対象の手術室入室から退室までの短時間に限られることで〈一人の対象との関わりは継続できない〉〈一人の対象との関わりを他の対象に活かす〉であった。

〈一人の対象との関わりは継続できない〉

「毎日違う患者をみる。」

「継続して患者をみるのは難しい。」

〈一人の対象との関わりを他の対象に活かす〉

「患者は変わるが、看護師は一人一人の経験を振り返り、次に活かして看護師は成長する。」

「患者と関わることで、他の患者のことを考えることができるので、一緒に成長できる。」

(5) 【安全安楽のための関わり】

【安全安楽のための関わり】とは、手術室看護師が対象に安全安楽を提供するケアを行い関わることで〈身体的ケアを通した関わり〉で構成されていた。

〈身体的ケアを通した関わり〉

「コミュニケーションの部分では関われないが、体にケアするという意味では関わることはできる。」

「体の面で患者にとっていいことになっているのは相互作用であると思う。」

(6) 【言語的コミュニケーションが困難である対象との関わり】

【言語的コミュニケーションが困難である対象との関わり】とは、手術室看護師は対象と言語的コミュニケーションがとりにくい状態で関わることで〈術後の看護をサポートする〉〈言語的コミュニケーションの機会を活かす〉で構成されていた。

〈術後の看護をサポートする〉

「病棟への継続で、急性期から回復期まで継続してみていると思った。」

「病棟看護師に申し送りをする事で関わりを持っている。」

〈言語的コミュニケーションの機会を活かす〉

「手術前から話をしたり会ったりすることで、人として認識して対応できる。」「患者への言葉かけを

みて、手術室看護師と病棟看護師の関わりが違っていると感じた。」

## 2) 手術室看護の課題

### 【援助的人間関係形成に疑問を感じる】

【援助的人間関係形成に疑問を感じる】とは、学生が手術室看護師と対象の人間関係としてのあり方に疑問を感じるということで、〈語らない対象との関わりを考える〉であった。

〈語らない対象との関わりを考える〉

「何も起こらないのは目にみえた反応ではないのでもなしさを感じないのか。」

「患者の意識がないことを考えると一方的な気もする。」

### 【対象と関わることを意味を考える】

【対象と関わることを意味を考える】とは、手術室看護師と対象の関わりから、学生が対象と関わることを意味を考えるということで、〈効果がみえないケア〉〈看護実践の評価をどのようにするのか〉で構成されていた。

〈効果がみえないケア〉

「ケアをして何も起こらないということも相互関係だと思った」

「看護師からは関わりを持てるが、患者の意識はないのでフィードバックはない。」

〈看護実践の評価をどのようにするのか〉

「意識がないコミュニケーションがとれない患者をみることは難しい。」

「コミュニケーションをとれない患者とどういうふうに関わるのか考えていく必要がある。」

## VI. 考 察

### 1. 手術室実習における学生の学びの特徴

まず、学生は、手術室は手術を行うために必要な環境を対象者の状態や手術内容により個別に調整されていること、手術室の物理的環境や麻酔・手術という治療法に伴う侵襲が、対象者に精神的にも身体的にも影響を及ぼすことを理解していた。また、手術室での看護は、手術療法に伴う侵襲により対象に不利益が起らないよう対象者の安全を守るために、他職種スタッフや手術室看護師との協働が重要であると理解していた。

手術看護とは、周手術期における患者の安全を守り、手術が円滑に遂行できるよう、看護を提供することである（日本手術看護学会、2005）。手術室実習を通して、学生は、対象者の安全を守るとはどのように看護実践することか、なぜ、円滑に遂行することが重要かについて体験を通して習得してい

た。また、手術室看護師の看護実践を時系列で体験することにより、環境や治療の影響による不利益から対象の安全を守ることなど手術室看護師の役割を全体的に捉えることができていた。

2 番目に、研究での結果と手術室看護実習に関する2つの先行研究（奥村他、2003；北村他、2004）とを比較すると、〈意思疎通ができない対象との関わり〉と〈対象の代弁者となり安全・安楽を守る関わり〉が、本研究における学生固有の学びであった。A看護大学の教育理念は、人間と人間の相互作用を通して、自己理解と他者理解を深めるというヒューマン・ケアリングに根ざしている（稲岡、2001）。学生が手術室看護師と対象者の相互作用に関心を持っていたからこそ、手術室看護師が対象に対して担う役割は、麻酔中で自分の意思を伝えられない対象者の代弁者として患者のニーズを満たす（日本手術看護学会、2005）という手術室看護の本質を理解できたと考える。

3 番目に、学生は、手術室看護師自身も対象との関わりを活かして成長する存在であると捉えていた。学生は、人間と人間の相互作用を通して、両者の自己成長・自己実現に向けた治療的・専門的援助関係を確立していくというヒューマン・ケアリング（稲岡、2001）の視点から自らの体験に基づき言語化していた。

学生は、手術室看護の課題として、【援助的人間関係形成に疑問を感じる】【対象と関わることを意味を考える】を見出した。学生は、語ることができない対象との関わりにとまどい、言語的コミュニケーションが不可能な対象における看護実践の評価をどのようにするか疑問を持った。学生は病棟実習で言語的コミュニケーションにより看護を評価した経験をもつが、手術室看護のように、言語的コミュニケーションが不可能な臨床場面を体験し、看護の評価について課題を述べた。

### 2. 学生の学びからみた手術室実習の課題

学生は、人間の尊厳を考慮した関わりや相互作用などヒューマン・ケアリングの視点での学びをしていた。しかしながら、実習記録の分析結果において〈麻酔・手術による影響〉という記述があるものの、病態生理学的な側面や治療が及ぼす影響などについての具体的な記述がない。このことから、学生は対象における病態生理学的な側面や治療が及ぼす影響などについての学びが浅いと考えられた。実習指導者は、学生が対象の病態生理学的な状態を治療との関連から理解し、より質の高い周手術期看護を創造できるように関わる必要があると考える。

看護師に求められる実践能力と卒業時の到達目標（平成23年厚生労働省；項目は『』で示す。）と手術室実習における学生学びとの関連を検討した。学生は、看護師の実践能力であるヒューマンケアの基本的能力（Ⅰ群）にある『倫理的な看護実践』や『援助的関係の形成』について学びがあった。しかし、健康の保持増進、疾病の予防、健康の回復に関わる実践能力（Ⅲ群）にある『急激な健康状態の変化にある対象への看護』のうち、その人の病態や治療の理解、治療が及ぼす影響については、学びが浅かった。実習指導者は、治療による対象者への影響という視点を提示し、学生の対象者への理解を深めるよう指導する。手術室と病棟の看護実践の違いを焦点にせず、対象が手術前から手術中そして手術後へと継続した存在であることを理解できるように指導する。また、手術室実習を経験することは、周手術期看護学実習に向けたレディネス形成につながる可能性が期待できる（溝部、鷺見、武藤、2007）。したがって、手術室において、対象を中心に手術前・中・後を結びつけた指導を行うことで、対象を全体的・全人的な存在として捉え、病棟における術前、術後のケアの意味の理解が深まると考える。

## VII. 本研究の限界と今後の課題

本研究では、手術室実習後の調査であることから、体験が美化されたり一部の体験のみを強調されたりした側面がある。また、学生は、A看護大学におけるすべての実習を終えた段階であり、語る内容に偏りがある可能性がある。

今後の課題として、学生は、卒業後に看護実践に手術室実習の経験をどのように応用しているか明らかにすることである。

## VIII. 結 論

手術室実習における学生の学びを明らかにすることを目的に、学生の実習記録の分析、学生への面接調査を実施し、以下の結論を得た。

1. 手術室実習における学生の学びとして、【手術室の環境の理解】【手術に関連した影響】【手術室看護師の役割】【手術室看護師の関わり】の4つのカテゴリを見出した。
2. 手術室実習で看護学生が認識した手術室看護師の関わりとして、【対象を尊重した関わり】【対象の気持ちを理解した関わり】【対象を成長に導く関わり】【短時間の対象との関わり】【安全安楽のための関わり】【言語的コミュニケーションが困難である対象との関わり】の6つのカテゴリを見出した。

3. 学生は、手術室看護における対象の特性、看護援助の目的や方法について理解し、ヒューマン・ケアリングについて体験に基づき言語化していた。

4. 実習のあり方として、実習指導者は、学生が病態生理学的な状態を治療との関連から理解し、より質の高い周手術期看護を創造できるように関わる必要がある。

## 謝 辞

本研究を行うにあたり、御協力いただきましたA看護大学の学生の皆様に心より厚くお礼申し上げます。

本研究は、第20回、21回の日本看護学教育学会学術集会で発表したものに加筆、修正しました。

なお、本研究は、平成21～22年度日本赤十字広島看護大学平成21、22年度共同研究費の助成により行いました。

## 文 献

- 稲岡文昭（2001）. ヒューマン・ケアリングを教育理念にしたカリキュラム構築と課題－日本赤十字広島看護大学の場合－. *Quality Nursing*, 7（1）, 23－32.
- 北村直子, 奥村美奈子, 兼松恵子, 田中克子, 小田和美, 梅津美香, 古川直美, 原 敦子, 林 幸子, 小野幸子, 坂田直美, 齋藤和子（2004）. 手術室実習を通しての学生の学び 第2報－学生が捉えた手術室で行われていた看護－. *岐阜県立看護大学紀要*, 4（1）, 92－98.
- 厚生労働省（2011）. 看護教育の内容と方法に関する検討会報告書. 2011年2月28日, <http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r98520000013l0q-att/2r98520000013l4m.pdf>
- 溝部佳代, 鷺見尚己, 武藤眞佐子（2007）. 周手術期看護学実習における手術室実習の有効性－学生の手術室実習に関する学びと態度の変化より－. *看護総合科学研究会誌*, 10（1）, 3－14.
- 日本手術看護学会（2005）. 手術看護基準（改訂2版）. 44－46・97. メディカ出版.
- 奥村美奈子, 兼松恵子, 北村直子, 田中克子, 小田和美, 梅津美香, 古川直美, 原 敦子, 早崎幸子, 小野幸子, 坂田直美, 齋藤和子（2003）. 手術室実習を通しての学生の学び. *岐阜県立看護大学紀要*, 3（1）, 89－94.
- Watson, J.（1988）／稲岡文昭・稲岡光子訳（1992）. *ワトソン看護論*. 東京, 医学書院.



# Lessons learned by nursing students in an operating room practicum

Nami IKEDA<sup>\*1</sup>, Takeshi HYAKUTA<sup>\*2</sup>, Kikuko UEDA<sup>\*2</sup>

## Abstract:

The purpose of this study was to clarify lessons learned by nursing students in an operating room practicum, and examine practicum instruction methods. We analyzed the records of an operating room practicum involving 30 students, and identified the following lessons: “understanding the operating room environment,” “effects related to surgery,” “the role of operating room nurses,” and “relationships of operating room nurses”. After conducting semi-structured interviews with nine students, we identified the following aspects of relationships maintained by operating room nurses: “relationships based on respect for the subject,” “relationships based on understanding the subject's feelings,” “relationships leading to the growth of the subject,” “the short duration of relationships with subjects,” “relationship aimed at safety and comfort,” and “relationships with subjects who have difficulties communicating verbally.” Students understood the characteristics of patients in operating room nursing, as well as the aims and methods of nursing support, and verbalized their views of human caring based on experience. Our findings underscore the necessity of practicum instructors to engage students in a way that creates higher-quality perioperative nursing care based on an understanding of treatment as it relates to the pathophysiological state.

## Keywords:

nursing students, operating room practicum, relationships of operating room nurse

---

<sup>\*1</sup> Hiroshima Red Cross Hospital & Atomic-bomb Survivors Hospital.

<sup>\*2</sup> Japanese Red Cross Hiroshima College of Nursing